コスモス　I

小林守城

僕たちはまだ唱えない
歌う旋律も和音も
本当は壊してきたままだ
できるどうかも分からない
遍く照らす新たな光束を
採譜できないできている

政治家の言葉も
詩人や宗教者の言葉さえも
消費されつくす幻影の都市
宇宙のカオスから吹く砂嵐

里山へ
電脳のまちから流民を連れ出し
それぞれの懐かしいスローガンを
敗走する僕たちの背中に聴こう
類の言葉はすでに拒んで久しい
だがその中にまだ潜む
壊れたいのちの破片をひろい
かすかな始原の信号を集め
自ら決裁する土場を拓くときだ

野の極み低きに暮れし弥生式

組織はついに個のためではなかったが
スローガンのない個は
もっと惨めだから
コスモスの群れ咲く野末で
その傍らに自律するのだ
一人のひとりのこだわりから生きて
群れに連なる道を
始める時が来たのだ

コスモス　Ⅱ

コスモスの群れ咲く傍らに立つと
テレビの映像が消えてものこる砂嵐の中に
嫁に行った山口百恵の「秋桜」が通り過ぎる
そのように色づいた僕たちには
赤子の記憶のようにそれを
羊水のごとくには思い出せない　＊

やたら消費の花々の時から
遠くいまはその幻影さえ散乱した
言葉はささくれた音の記号となって
よれよれに酩酊している
コスモスは去年も今年も
時が回れば咲き乱れて

それでいいのだ
里山から下りてくる
キの字すがたの秋茜
飛び交うその傍らに佇み
僕たちは通り過ぎる

花の言葉を眼深くに聴き
花に思いを託してきた歴史は
既にたそがれている
崩れ折れた花や茎の傍らで
いまはそれぞれが静かに生きて
自裁の道を開く時なのだ

＊ テレビの映像を消したザーという砂嵐の音律は
胎児が包まれている羊水の音律らしい。
泣いていた赤子もその音を聞くと
みな泣きやむのだという。

（山本十四尾詩集「舞雪」・「水子幻想Ⅵ」より）

コスモス　Ⅲ

ＫＯＳＭＯＳ
　ギリシャ語で秩序ある世界。万物を秩序だて統一している世界。宇宙。
　ＫＨＡＯＳ（カオス・混沌・万物発生の根源の秩序なき状態）の対義語。
ＣＯＳＭＯＳ
　ラテン語でキク科の一年草。メキシコ原産。オオハルシャギク。秋桜。明治二十年ごろ日本に渡来。群生し景観植物として利用される。外来種で在来の自然植生の撹乱という批判もある。キバナコスモスは大正時代に渡来。オオハルシャギクに比べ暑さに強い。　（ウィキペディア参照）

コスモスの頭文字が「ＫとＣ」の一字違いで
「宇宙と秋桜」の違いになっているとは知らなかった。
だが、秋風に群れ立つ一年草の多産系の花茎に
むしろ、カオスへ旅立つ風を感じたとて
その直覚が宇宙的には間違いとは言えまい。

想像の翼で青く跳んでみよ
暑かった夏が後ずさりすると
コスモスが澄んだ虫の音を連れてくる

コスモスや根もと鎮まる蟻地獄

コスモスや群れて一筋自裁あり

コスモスや背景放射の風立ちぬ　＊

＊宇宙マイクロ波背景放射　（ＣＭＢ）　宇宙を満たす極低温のマイクロ波。１９４６年ガモフが提唱したビッグバン宇宙論に整合し、ビッグバン初期宇宙の痕跡であることが１９６４年アメリカベル研究所のペンジアスとウィルソンによって発見された。１９７８年ノーベル物理学賞受賞。（ウィキペディア参照）